研究ノート

台湾神社　今なお残る遺跡の数々と新事実

金　子　展　也
KANEKO Nobuya

はじめに

明治28（1895）年4月17日，下関条約によって日清戦争が終結し，この条約によって台湾の割譲が決まった．そして，北白川宮能久親王率いる近衛師団が，台湾の平定のために台湾に渡り，同年5月31日に澳底に上陸した．抗日ゲリラと闘いながら南下し，台南城を目指したが，途中マラリアを患い，10月28日，台湾全土平定直前に台南にて薨去した．その北白川宮能久親王と開拓三神（大国魂命，大己貴命，少彦名命）を祀る台湾の総鎮守として，明治34（1901）年10月27日に鎮座したのが官幣大社台湾神社である．内地からも数多くの高官や皇族が参拝し，多くの献納品がなされた．

終戦後，台湾神社の跡地に建立された圓山大飯店（グランド・ホテル）の敷地を見渡しても，ここに神社があったとは判りにくい．一般の案内書で確認できるのは，ホテルの前庭にある一対の唐獅子，圓山公園入り口沿いに残っている大型の狛犬一対，そしてホテルレストランに向かう通路にある水を吐く金色の龍程度である．果たして，台湾神社の遺跡はこの程度しか残っていないのか，または他の場所に移動されて人目にもさらされず残っているのではないかと思いつつ，遺跡の行方を追ってはや10年が過ぎてしまった．今回の研究ノートでは，2012年までに調査を終えた台湾神社の遺跡を紹介する．

《狛犬――唐獅子の誤解と新たな遺跡の確証》

台湾神社には3対の狛犬が奉納された．1対は，圓山大飯店前庭の中国式唐獅子．石材は，当時の台北州観音山産石であり，中国南方形の獅子である．一般的に，明治34（1901）年9月6日，台湾神社の鎮座式に先立って板橋の富豪林本源が林本源五落新大厝門庁にあったものを奉納し，第1鳥居前に安置されたと言われている．圓山大飯店の説明書および一般の書物にも何ら疑いもなしにその通り記載されている．疑いがあっても確証がないからである．台湾神社の古い絵葉書や写真に掲載されている唐獅子と比較すると，明らかに異なっていることがわかる．ある台湾のブログによると，圓山大飯店前の唐獅子は，昭和8（1933）年8月に撮影された写真の中にあるものと同じで，しかも石台には「台湾総督石塚英蔵」と彫られているとのことであった．早速，写真の掲載元である中嶋康博氏のホームページ「田中克己文学アルバム」[(2)]で確認すると，まさしく「台湾総督石塚英蔵」と刻まれている．写真から，この唐獅子は，第2鳥居の前あたりにあったようである．間違いなく，昭和5（1930）年12月28日に第13代総督石塚英蔵が奉納した唐獅子である．この時，石塚総督は，神奈川県江の島にある兒玉神社に唐獅子を奉納するために，台北孔子廟建立のために来台中の支那の名工に2対の唐獅子を彫像せしめた．そして，出来上がった唐獅子の1対は，12月17日，高雄港から内地に移送され，もう1対は台湾神社に奉納されたのである．これら2対の唐獅子は，酷似しており，石材は同じ観音山産が使用された．

それでは，林本源が奉納された唐獅子はどこにあるのか．二二八和平公園内の馬祖を祀る福徳宮前に安置されている1対の唐獅子がある．この唐獅子が極めて林本源が奉納したものと酷似している．断定は出来ないが，同一のものである可能性が高い．

もう1対は，圓山公園からMRT剣潭駅に向かう中山北路沿いの圓山公園入り口に残っている大型の狛犬

である．左右の配置が異なっているが，これは明治35（1902）年7月13日に台湾陸軍高等官により奉納された狛犬である．石材は山口県徳山産御影石(3)．内地の石匠により制作された．この規模の大きさの狛犬は他の神社遺跡の中には無いものである．

写真1　圓山大飯店の前庭にある唐獅子

写真2　石塚総督が奉納した唐獅子（出典：「田中克己文学アルバム　昭和8年8月台湾神社にて」）．石台の楕円の部分を拡大すると「台湾総督石塚英蔵」と刻まれている

〈考察〉写真1は，林本源が奉納した唐獅子ではない．写真2から石塚総督が奉納したものであることが判明される

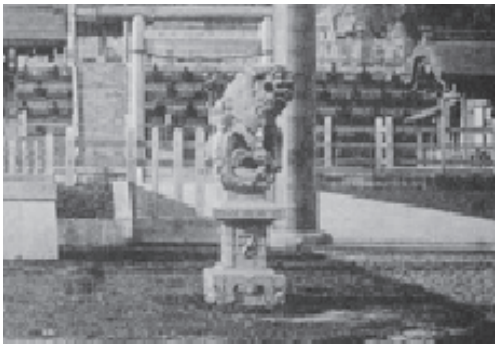


写真3　林本源が奉納した唐獅子（出典：非文字資料研究センター，海外神社データベース）

写真4
福徳宮前に安置されている
唐獅子

〈考察〉第1鳥居前に配置された唐獅子は，福徳宮前に移設された可能性が高い

写真5　中山北路沿いに残っている大型の狛犬

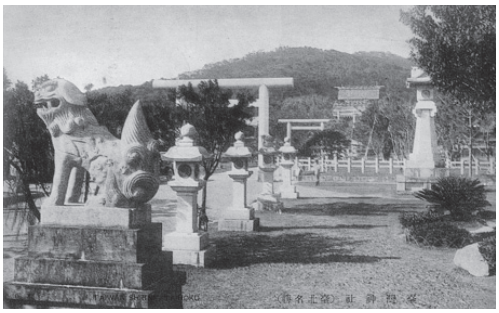


写真6　社頭前の狛犬（出典：非文字資料研究センター，海外神社データベース）

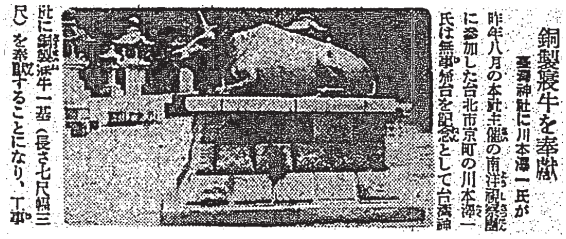
《銅牛――明らかになった奉納者》

現在の二二八和平公園内の国立台湾博物館前にある2基の銅牛も台湾神社の遺跡である．これは，大東亜戦争時に，時の満州国より台湾神社に奉納されたものであるとの説もある．その後の調査で，1基は，台北市京町の川本澤一が昭和11（1936）年8月，台湾日日新報社主催の南洋視察団に参加し，無事帰台した記念として翌年の7月1日に「銅製寝牛」を献納していることが判明した．この銅牛は，博物館に向かって右の青銅製のものである（写真7）．もう1基は，紅銅製

のものであり，宗教団体・福田海(ふくでんかい)[4]が，昭和10（1935）年10月15日に奉納したものである（写真8）．材質には，心経(しんぎょう)が彫られた銅版が使用され，その背には，日本・台湾・満州を含む地図が浮き彫りにされていたという．牛像は，大阪市高津の鋳物師今村久兵衛(いまむらきゅうべい)[5]作である．筆者の台湾の知人であるご老人の話によると，これらの銅牛は，神社境内の大広場にあり，中学校の集団参拝時には見かけたと言っておられた．

写真7　川本澤一が奉納した青銅製銅牛

写真8　福田海が奉納した紅銅製銅牛



銅製寝牛を奉献

臺湾神社に川本澤一氏が

昨年八月の本社主催の南洋視察團

に參加した台北市京町の川本澤一

氏は無事旅行を記念として台湾神

社に銅製寝牛一基（長さ七尺幅三

尺）を奉献することになり，工場

写真9　銅牛奉納の記事（出典：台湾日日新報　昭和12年6月30日夕刊）

《鳥居 ── 東方芸術の殿堂に再利用》

台北から南西に20 kmほど行ったところに三峡(サンシャ)と言う老街があり，この場所に「東方芸術の殿堂」と呼ばれる清水厳祖師廟(そしびょう)[6]がある．当時，台湾神社に奉納された御影石で出来た鳥居が，いまなおこの祖師廟にある．実際に確かめてみると，本殿の中の両側に高さ5 mもある石柱が4対計8本ある．終戦後の1947年，祖師廟が3度目の改修を行うとき，再建計画の最高責任者を任された芸術家李梅樹(りばいじゅ)[7]が，台湾神社で使用されていた御影石鳥居を購入しようとしたが，当時の値段が4,000万元であり，とても購入できる値段ではなかった．1949年，中華民国政府の貨幣価値の変更（4万台湾元が1新台湾元）により，輸送費込み5,510新台湾元で購入が出来たとのことである．

記録では台湾神社に2基の御影石鳥居が献納された．1基は，参道と士林(しりん)街道の岐点に，明治44（1911）年10月，土木業を営み，渡台10年記念として奉納した台北の高石組高石忠慥，もう1基は，明治橋前派出所下にあり，大正3（1914）年10月，高雄の古賀組古賀三千人(こがみちんど)[8]によってである．いずれも山口県徳山産御影石で出来たものであった．従って祖師廟本殿の柱はこれらを使用したものである．

写真10　三峡祖師廟の本殿に使用されている石柱

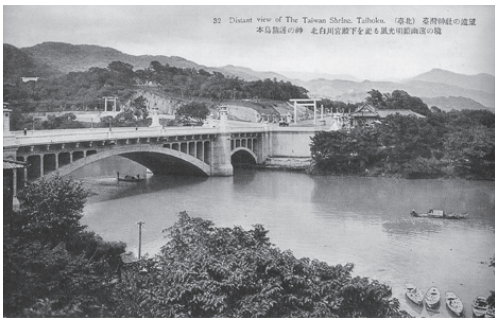


写真11　明治橋奥および写真左側に小さく見える2基の鳥居（出典：非文字資料研究センター，海外神社データベース）

《青銅製登龍噴水器 ── 3爪龍》

圓山大飯店内のレストランに向かう通路の真ん中に

水を吐く金色の龍（龍尾穴）は，かつて台湾神社の第1鳥居前の参拝休憩所そばにあった池に置かれていた銅製のものであった．ホテル内のレストラン金龍餐庁に安置されていたが，1987年に金龍餐庁改築の際に金メッキが施されたと案内書に書かれている．これは「青銅製登龍噴水器」と呼ばれ，台北市撫台街で料亭「竹酒家（たけのや）」を経営する館野弘六が大正8（1919）年11月28日に奉納したものである．良く見ると，この龍は中国伝統の4爪龍や5爪龍とは異なる3爪であり，非常に珍しいものである．

写真12　ホテルのレストランへ行く途中にある3爪龍

写真13　写真左に水を吐く龍が見える（出典：非文字資料研究センター，海外神社データベース）

《灯籠 ── 御影石灯籠の行方》

鎮座当時，奉納された石灯籠は数基のみであったが，昭和10（1935）年までには300基ほどの石灯籠が奉納されている．これらの内，明治40（1907）年から大正3（1914）年までに侯爵，伯爵や男爵などより御影石灯籠が16対，7基計39基が奉納された．現在遺跡として確認されているのは台北市立児童育楽中心の中山北路出入口付近の1基の石灯籠だけである．但し，これは一般の石材である．

これだけの御影石灯籠が奉納されたにも関わらず，現存するものが全くない理由が，2012年の調査で判明した．この年に，祖師廟にあるとされる御影石灯籠の竿の部分を確認するのが目的だった．確かに，1基の竿の部分は発見できたが，その他の建築物資材に埋もれ，表面を確認することが出来なかった．運良く，祖師廟の総幹事李文寶（リーブンパオ）さん経由で李景暘（りけいよう）さんと連絡を取って頂いた．この李景暘さんは，台湾神社の御影石鳥居を購入した李梅樹さんの御子息であり，李梅樹教授紀念文物館[(9)]館長でもある．あまりの偶然に驚き，時間の経過も忘れて話し込んだ．2度目の驚きは，李梅樹さんが購入したのは鳥居だけではなく，御影石で出来た灯籠まで及んでいたことであった．これで，遺跡として存在していない理由が判明した．それでは，その御影石灯籠はどこにということになる．これらは，祖師廟の本殿を取り巻く壁画彫刻の外枠に使用されているとのことである．李さんの案内で確認すると，間違いなく，御影石の石材がふんだんに使用されていた．まさか，祭神と場所を変えて，この石材が使用されているとは考えてもいなかった．祖師廟を建て替える時，李梅樹さんは，清朝の建築様式に，日本の御影石を採用し，そして東洋と西洋の文様をふんだんに取り入れることを目指したに違いない．

写真14　御影石灯籠が使用されている壁材を説明する李景暘さん

写真15　台北市立児童育楽中心の石灯籠．大正12（1923）年10月1日に船越倉吉を組長とする台北消防組が奉納したものである

《鎮座記念碑 ── 資材置き場の記念碑》

昭和6（1931）年に発行された「御鎮座30周年記念台湾神社写真帖」の中に，旧参道入口あたりに鳥居と灯籠を見ることが出来る．その横に，何も説明がないが，何かの記念碑らしきものが写っている．そして，この記念碑の存在が台湾の知り合いのブログで紹介されていた．場所は，新北市林口区にある観音寺．2012年，この調査で訪問し，探し回ったが見つからず，また，管理事務所でも全くわからないとのこと．この時は，本殿の一部が工事中であったため，半ば諦めかけて，再度管理事務所に挨拶に行った時，一人の事務員の「知っているよ」との一声で，本殿裏の資材置き場に案内して頂いた．高く積もった石材の片隅に，探し求めていた記念碑に出会う．「官幣大社　台湾神社鎮座式記念碑」に近づく．全くの無傷の状態であり，碑の裏側に廻ると「明治三十四年十月二十七日臺北衆紳民建之」と書かれてある．残念ながら，この献納者については全く情報がない．

写真16　台湾神社鎮座式記念碑

写真17　記念碑の上部

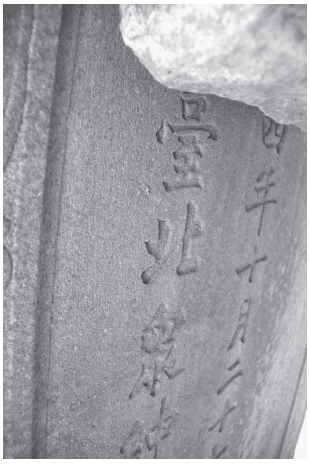


写真18　記念碑の裏側

写真19　灯籠横にある鎮座記念碑（出典：御鎮座30周年記念台湾神社写真帖 ── 台湾旧照片資料庫・国立台湾大学図書館デジタル版）

《太鼓 ── 今なお打ち鳴らされる太鼓》

台湾神社で使用された大太鼓が龍山寺（ロンシャンス）[10]（台北市広州街）で見つかった．2007年，この太鼓に関して国立台北芸術大学が行った研究調査（「圓山台湾神社　獨木大鼓研究計画」）の内容によると，この大太鼓の大きさは長さ160 cm，最大直径151.5 cmのものである．太鼓の腹部には「奉獻　皇紀二千六百年記念[11]　臺湾技術協会」および「上鳴保證」の文字を見ることができる．台湾技術協会は，建築・土木・農業・物理・化学・機械・漁業分野などからの技術者を集め，昭和11（1936）年に設立された．折りしも，国際情勢の緊迫化と国家非常時体制の時であった．残念ながら，この太鼓は一般公開されていないが，旧正月前の大晦日にのみ打ち鳴らされるようである．

さらに台湾神社の太鼓がもう1つ新北市新荘区中正路の太鼓店（响仁和太鼓廠）に保存されている．2008年，台湾の友人から送られてきた写真からは「奉獻　台灣神社　昭和十二年六月　本町會」の文字が読み取れた．内側には「愛知県海部郡津島町　太鼓製造所

山本慶助　調製」と書かれていた．この山本慶助は確かに現在の海部郡津島市で太鼓の製造を行っていたが，既に1980年以前にはその製造を終えており，後を継ぐ人も無かったため残念ながら詳細な情報はない．

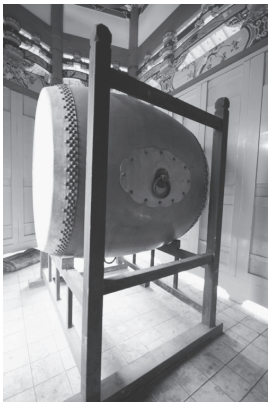


写真20
龍山寺の太鼓（提供：黄士娟）

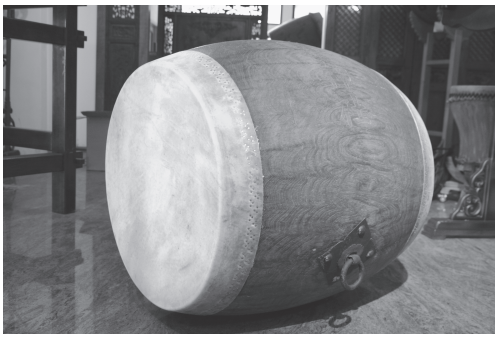


写真21　新しく面が貼りかえられた响仁和太鼓廠の太鼓

写真22　元々の太鼓の面

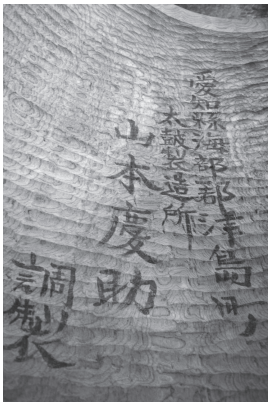


写真23
太鼓の内側（提供：郭人豪）

《献兵器記鐫刻碑と海軍献納砲》

圓山ホテル前の大牌楼を過ぎると広場の唐獅子左側に「劍潭神址」記念碑がある．これは，台湾神社への奉納品である海軍戦利砲の台座に献兵器記鐫刻碑が据え付けられたものである．献兵器記鐫刻碑は，自然石に銅版を嵌こんだもので，昭和4（1929）年3月28日に台北紙文具商組合が献納したものである．

一方の海軍戦利砲の石座は，明治43（1910）年4月，海軍大臣斎藤實がロシア製6インチ砲の献納に際して，台北製糖会社社長木下新三郎ら24名が，その石座及び砲身の据付け費の負担を申し出，森山松之助[12]の設計により起工され，同年6月15日に竣工したものである．砲身には，「日本海戦捷記念」の7文字が嵌めこまれた．

写真24　劍潭神址

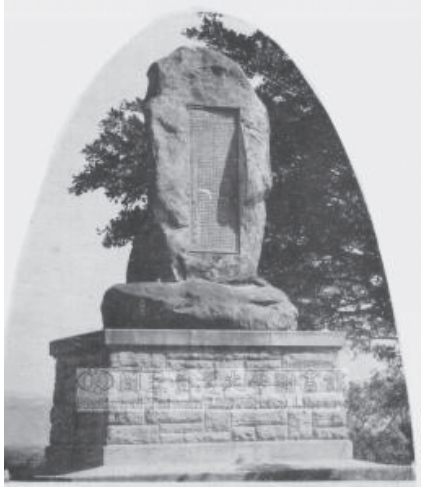


写真25　献兵器記鐫刻碑（出典：御鎮座30周年記念台湾神社写真帖 ── 台湾旧照片資料庫・国立台湾大学図書館デジタル版）

写真 26
海軍戦利砲（出典：御鎮座 30 周年記念台湾神社写真帖 ── 台湾旧照片資料庫・国立台湾大学図書館デジタル版）

〈考察〉劍潭神址は，献兵器記鐫刻碑と海軍戦利砲を組み合わせたものである

《陸軍献納砲 ── 国軍歴史文物館前の献納砲》

台湾神社に奉納された陸軍献納砲 5 門がいまだに保存されている．場所は MRT 西門町そばの国軍歴史文物館前である．大正 10（1921）年 11 月に再版された台湾神社社務所編纂の「台湾神社誌」によると，下記の通り記載されている．

① 明治 27-28 年の戦利砲であり，陸軍省の献納．明治 34 年 10 月，府費で境内第 1 鳥居左右に配置（写真 31，32 を参照）
克式 12 珊米加農　　2 門
（ドイツクルップ社製 12 cm カノン砲）
安式 5 珊米加農　　1 門
（英国アームストロング社 5 cm カノン砲）

② 明治 37-38 年の戦利砲であり，明治 39 年 1 月中，兒玉総督の斡旋により，陸軍省より献納．同月 24 日，第 1 鳥居外左右に配置（写真 27 参照）
3 吋（inch）速射野砲　　1 門
15 珊（cm）短加農砲身　　1 門

③ 明治 40 年 3 月，寺内陸軍大臣の文を添えて献納．旅順要塞線で，ロシア軍が盤龍山南方に砲台に取り付けたものであり，第 1 鳥居前に戦利砲と共に配置
23 珊臼砲（きゅうほう）　　1 門

写真 27　陸軍戦利砲（3 吋速射野砲　一門　15 珊短加農砲身　一門）．兒玉総督の斡旋により，陸軍省より献納された（出典：御鎮座 30 周年記念台湾神社写真帖 ── 台湾旧照片資料庫・国立台湾大学図書館デジタル版）

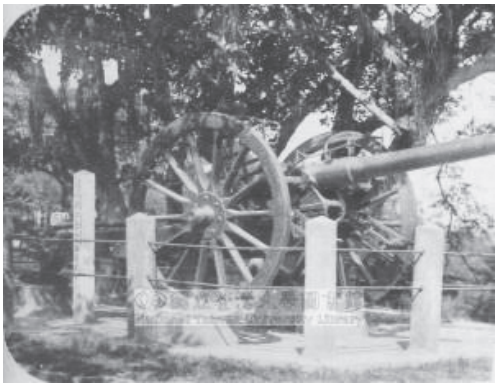


写真 28　陸軍戦利砲（23 珊　臼砲　一門）．兒玉総督の申出にて特に陸軍省より奉献の分．明治 43 年 3 月寺内陸軍大臣の奉献にて記文銅版を砲架に嵌入せり（出典：御鎮座 30 周年記念台湾神社写真帖 ── 台湾旧照片資料庫・国立台湾大学図書館デジタル版）

写真 29　第 1 鳥居休憩所前に献納砲（詳細不明）と水を吐く龍が見える．形的にはロシア製 15 cm カノン砲のように見える（出典：御鎮座 30 周年記念台湾神社写真帖 ── 台湾旧照片資料庫・国立台湾大学図書館デジタル版）

写真 30　ロシア製 15 cm カノン砲（中央）

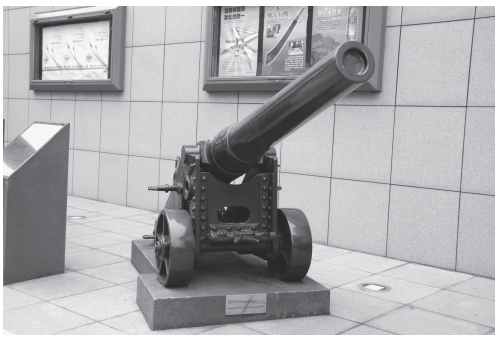


写真 31　ドイツクルップ社製 12 cm カノン砲

写真 32　英国アームストロング社 5 cm カノン砲

《街路灯》

圓山大飯店の大きな牌楼の手前に太原五百完人塚があり，その手前に彩色豊かな記念堂がある．その横に台湾神社の街路灯が横たわっている．「大正十三年四月十六日　川田●治」と刻まれている．思いがけない所に神社遺跡が残っている．

写真 33　横たわる街路灯

終わりに――残された課題

こうして見ると，台湾神社の神苑（太鼓を除く）に配置されたほとんどの奉納品が，何らかの形で現在もなお，各地に散らばりながら保存されているように見える．しかしながら，下記の 3 点の行方はいまだ不明である．引き続き調査を続けて行きたい．

① 石像仙童玉女（1 対）：神社社頭前の常夜灯そばにあった石像で，大稲埕（だいとうてい）の湯和尚が明治 35（1902）年 9 月 13 日に奉納した．

② 神馬（しんめ）：第 1 鳥居前には，2 基の神馬が奉納された．それぞれ，大正 11（1922）年 9 月 24 日台北庁出入請負業者 42 名の同業組合，そして大正 14（1925）年 4 月 15 日，岩橋ていおよび古矢正三郎によってである．

③ 石灯籠：御影石を使用した石灯籠以外に台北州の観音山産石などを使用した石灯籠は約 220 基が奉納された．御影石以外の石灯籠で現在遺跡として残っているのは，台北市立児童育楽中心の中山北路出入口付近の 1 基だけのようである．

写真 34
第 1 鳥居前の石像仙童玉女
（出典：非文字資料研究センター，海外神社データベース）

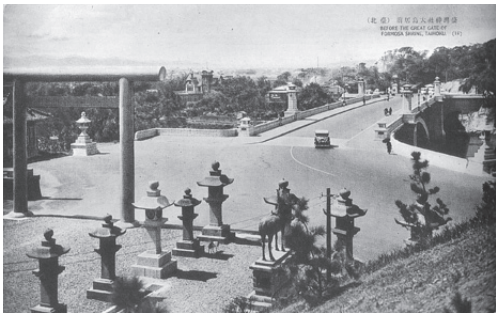


写真 35　鳥居手前右に神馬が見える（出典：非文字資料研究センター，海外神社データベース）

注

（1） 林本源は，板橋林家とも称し，清朝統治下の台北板橋における家族の総称．林家は，福建漳州府龍渓県白石堡を出身とする家族である．台湾における開祖は，林応寅であり，1784年（乾隆49年）に長子林平侯と共に新莊に移住したのが最初である．日本統治，米穀業で財を成した．死後は，財産を「飲」，「水」，「本」，「思」，「源」の5つの屋号にて林国棟，林国仁，林国華，林国英及び林国芳の息子5人に分割された．そして「本」，「源」を相続した林国華と林国芳が同母兄弟であったため，後に商号を合わせて林本源と称されるようになった．住居は現在板橋林家花園と称されており，往時の豪華さを偲ばせる住居跡は板橋の観光地となっている．

（2） 1911-1992年．詩人，東洋史学者．「四季」「コギト」編輯同人．昭和初期の抒情詩（じょじょうし）復興期において，その硬質孤高の抒情が伊東静雄（いとうしずお）と並び称さる．「詩集西康省」「大陸遠望」等の詩集のほか，東洋史，ドイツ文学，支那古典文学の精髄を極めた著作が多数ある．
中嶋康博氏の「田中克己文学アルバム」アドレス：
http://libwww.gijodai.ac.jp/cogito/index.htm

（3） 花崗岩（かこうがん）の石材の通称．細かい粒状の模様をもち，色合いによって黒御影・白御影・桜御影・赤御影などと呼ばれる．硬く，耐久性があり建材や墓石などに用いる．山口県徳山の黒髪島は，「徳山みかげ」と呼ばれる御影石の採石で知られ，明治の当初から採石事業が行われ，大正6年の国会議事堂の建設に当たっては，議事堂の腰部，中庭の外装，空堀の周辺などに使用されている．「徳山みかげ」は，美しく気品のある日本の代表的な御影石で，青灰白色で粒子が大きく，大変硬く，風化摩滅に強いため，サビや変色の恐れがないと言われている．

（4） 中山通幽（つうゆう）が24歳のときに修験道の修行を始め，神儒仏に老荘（ろうそう）を加味した思想を確立した．明治33年に大阪で大規模な無縁仏供養を行い，陰徳積善（いんとくせきぜん）に一生をささげることを決意した．溝さらいや霊場旧跡の修復，無縁仏のお祭りなどを行った．これにより京阪神に多くの信者を得て明治41年，大阪で福田海の開宗を宣言．昭和2年に現在の岡山市吉備津を福田海の聖地とした．鼻ぐり塚を造り，牛馬の成仏も祈っている．銅牛奉納に関する記事は，福田海本部が，昭和49年に発行した「中山通幽尊師の一代とその思想」に掲載されている．

（5） 大阪市高津の鋳物師．今村家は江戸時代から代々鋳金業を営んでおり，その伝統と実績を背景に大阪城天守閣復興という歴史的事業への名誉ある貢献を希望されたと言われている．その鯱（しゃち）の原型製作は，寄付者・今村久兵衛氏の弟で東京美術学校（現在の東京芸術大学）彫刻科出身の今村重三郎氏．久兵衛氏が鋳造を担当した．生田神社（兵庫県神戸市中央区），愛宕神社（東京都港区）や小野八幡宮（兵庫県神戸市）に奉納されているブロンズ製狛犬は，同氏が鋳造したものである．

（6） 清水厳祖師廟は祭神として，北宋末の忠臣，陳昭応（ツエンサオイン）を祀っている．陳昭応とは，元との戦いに優秀な戦果を残し，英雄となった人物で，晩年福建省の清水厳に隠居していた．人々は彼を「清水祖師」と呼び尊敬していた．台湾は福建省から移住して来た人々が多く，郷土の偉人「清水祖師」を祀るようになったのが始まりだとされている．この祖師廟は，建立されてから3度，大規模な修復が行われた．1度目は，1833年，台湾北部を襲った大地震により損壊した時．2度目は，1895年に日本軍が三峡に侵入した際，日本軍の焼き討ちにあい，三峡の街ごと焼失した時．3度目の修復は，積年の傷みを修復するためのもので，1947年に始まった．この時の修復の責任者は，三峡の街長の家柄で，芸術家として名高い李梅樹であった．

（7） 1902-1983年．三峡の街長の家柄で，芸術家として名高い．27才の時，東京美術学校（現在の東京芸術大学）で写実画を研究．台湾に戻ってから，大学や専門学校で教鞭をとり，郷土芸術の発展に尽くした．

（8） 明治29年，鉄道員として台湾に渡る．その後，土木建築に従事し，澤井組打狗（だこう）（現在の高雄）を経て，明治39年に古賀組を創設する．明治40年以降の製糖産業の発展に伴い，工場，事務所や住宅の建築を請け負い，大いに業績を伸ばす．以降，鉄道部の鉄橋建設業務も請け負い，相当な利益を上げる．また，製脳，製糖や製氷業にも進出．内外の役職も歴任し，打狗内地人組合，高雄工会，高雄商工会および高雄信用組合を設立し，地方公共事業や地方開発に大いに貢献した高雄における有力者の1人であった．総督府評議委員，衆議院議員や台湾商工銀行頭取も務める．

（9） 画家李梅樹の精神を後世に伝えていくため，1990年，文化庁の認可を受けた財団法人として発足した．1995年4月に新北市三峡鎮中華路43巷10號へ引っ越し，正式に「李梅樹紀念館」と命名された．

（10） 1738年，福建省泉州から渡来した人々により，福建普江安海龍山寺の分霊として創建された．台北市内で最古の寺院であり，国家古蹟である．本尊は観世音菩薩であるが，現在では道教や儒教など様々な宗教と習合しており，孔子や関帝（関羽，三国志で知られる），媽祖など，祀られている神は大小合わせて100以上に及ぶ．

（11） 昭和15年が神武天皇の即位から2600年に当たるとされたことから，日本政府は昭和10年に「紀元二千六百年祝典準備委員会」を発足させ，橿原神宮や陵墓の整備などの記念行事を計画・推進した．「神国日本」の国体観念を徹底させようという動きが時節により強められていたため，これらの行事は押し並べて神道色の強いものであった．

（12） 1869-1949年．日本統治時代の台湾で活躍した建築家．大阪市出身．明治39年に台湾に渡り，大正10年までの間，台湾総督府営繕課技師として多くの官庁建築を手がけた．